



Title	戦後日本における洋裁教育としての批評とその形式主義的側面：雑誌『装苑』の言説をもとに
Author(s)	五十棲, 亘
Citation	デザイン理論. 2022, 80, p. 110-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89282
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

戦後日本における洋裁教育としての批評とその形式主義的側面

雑誌『装苑』の言説をもとに

五十棲 亘 神戸大学大学院在学, 京都服飾文化研究財団

はじめに

『装苑』は、洋裁学校「文化服装学院」の機関誌として、1936 年に創刊された服飾雑誌である。『装苑』は、日本における欧米圏の服飾文化受容や、戦後の洋裁文化の形成に寄与したメディアとしての重要性が語られてきた一方、戦後日本のファッションデザイン批評との関わりに対しては、これまで多くは明らかにされてこなかった。

本発表が戦後の『装苑』に着目するのは、流行受容や洋裁教育と連動しながら、「ファッションデザイナー」が学校経営者・教育者として多大な影響力を有し、次第に芸術家としても表象された状況下において、彼らへの価値形成が行われた言説空間として『装苑』を位置付け、そうした価値づけの先駆的な実践とその歴史的意義を、本雑誌がとりわけ戦後に行った「ファッションデザイン批評」の事例から考察し得ると考えるからである。そこで、洋裁文化の形成とファッションデザイナーの育成に大きく寄与した『装苑』が、衣服の美的側面に対する価値づけをいかに結実させ、ファッションデザイン批評の手法を構築してきたのか、その展開の歴史的変遷を考察した。そして、衣服の制作・流行への語り・衣服の美的側面への価値づけが批評として結びつくなかで、いかなる語りの困難が顕在してくるのかを明らかにした。

ファッションデザイン批評の興隆

戦後の『装苑』では、基礎的な洋裁技術を指南する「技術記事」、欧米圏を中心に、ファッションデザイナーや彼らの制作する衣服を紹介する「流

行解説」、流行の衣服に用いられている技術を解説する「流行の部分縫い・部分裁断」などの諸記事により、洋裁文化の隆盛と服飾流行の膾炙を背景に、それらをシルエットとして語る言説が誌面内で衣服制作の記事と結びつく。それらと並行し、「装苑賞」をはじめとした服飾品にかかわるコンクールが増加し、洋裁学校の教師・生徒間の関係性を基盤に、彼らの垂直的な批評を介した言説空間を形成されていく。このように、欧米圏の服飾流行やデザイナーの存在が前景化することで、個別のデザイナーを誌面で取り上げるためには、「なぜ特定のデザイナーやそのデザインには価値があるのか」を読者に説得力をもって伝える言説、すなわち批評が誌面で必要になった。

衣服の造形に基づくファッションデザイン批評

欧米圏の流行受容や服飾コンクールの増加に促される形で、『装苑』誌面においても、ファッションデザイナーの制作物を「作品分析」として記述する記事が増加して行く。そうした記事は、洋裁技術の知見から衣服を紐解き、その造形的特徴を中心に記述を行うことで、美的価値とともに、「パリモード」の文化的価値を描出し、その優位性を位置付けた「作家・作品主義」的な側面に特徴がある。とりわけ、桑沢洋子による「デザインの基礎勉強」と伊東茂平による「デザイン講座」の連載では、デザイン理論を用いた作家・作品主義的批評の実践において、ファッションデザインの固有性として、衣服の「身体性」を基軸に議論を展開した。このようなパリモードの微細なシルエッ

トを実現する技術を着用者の身体の問題へと拡張し、ファッションデザインを言語化した試みは、戦前期において既に「用の美」や「動の美」といった概念を用いて考察を行なった田中千代の『新女性の洋装』（1933）にて散見される。しかし、雑誌メディアを介した教育と産業を横断する洋裁文化の言説空間において、教育者が「批評家」としての振る舞いをも獲得し、その状況下でファッションデザインの芸術性と身体性を強固に結びつける言説が支配的になったことは、戦前期との特筆すべき差異だといえる。すなわち、一方で、衣服の複製の困難を説くことでパリモードの作家・作品性を擁立しながら、他方で、衣服を着る身体を基軸に議論を展開することで、批評家としての洋裁教育者がファッションデザインとそれへの批評の固有性を主張した側面にこそ、戦後の『装苑』で展開された批評の大きな特徴が見受けられる。

機能主義的ファッションデザイン批評の問題

1958年に始まった「デザインの批評と鑑賞」をはじめ、戦後の『装苑』では、批評それ自体に焦点を当てた連載が登場する。そこでは、ファッションデザインを洋裁技術の知見に基づきその造形的特徴から繙く言説が、着用者の身体性ととともに語られることで、しばしばデザインの企図における、着用の可否をめぐる価値判断が重視されるようになった。このように、衣服を作ること・流行を語ること・衣服を作品として捉えることが批評として結びつき、衣服を「着ること」の課題が顕在化してくるなかで、中田満雄のような論者をはじめ、ファッションデザインの特質をその機能性に還元する言説が次第に支配的となっていく。しかし、ファッションは、その新しさをひとつの価値とするゆえに、その更新を目指して展開する流行のシルエットは、必ずしも用途に沿って与えられる機能美を有するように創出されるわけではない。それゆえ、ファッションデザイン批評が、とりわけ平面芸術との差異を主張し、その固有性を着用者

の身体に置くのであれば、必然的に「着ること」をめぐる論点を看過できず、他方で、流行現象でもあるファッションは、機能性とは離れたところで恣意的にうつりかわるため、その両者を衣服の造形の上で捉えることには矛盾が生ずる。すなわち、戦後『装苑』におけるファッションデザイン批評の問題のひとつは、ファッションの固有性を身体性に帰することで陥る機能主義と流行現象への批評を洋裁文化の言説空間で並立する矛盾に辿ることができなかった点にある。

おわりに

本発表では、戦後『装苑』における、ファッションデザインに対する言説が、洋裁文化と関わりながら、衣服の造形と機能性との関係よりファッションデザインを価値づけ、「批評」として形式化されていくその歴史的展開を検討してきた。そこで明らかになったのは、第一に洋裁教育の言説空間における衣服の物質的条件への関心とファッションデザイン批評との結びつき、第二に洋裁文化における衣服やその制作者が「作品」や「作家」とみなされる過程とファッションデザイン批評との関係、そして第三に、機能主義的なファッションデザイン批評における、現象や概念としてのファッション、あるいは衣服に外在する文化・社会的コンテクストに対するアプローチの困難であった。こうした戦後のファッションデザイン批評の問題は、衣服が作る対象から消費する対象へと変容するなかで、洋裁文化とともに、その後自壊していったかのように思われる。しかし、現在のファッションデザイン批評においても、着用者の身体性と衣服の造形性、そして作品としての自律性との間に生ずる軋轢が指摘されるように、それらは、本発表で検討した事項と密接な繋がりを有している。すなわち、本発表で明らかにしたファッションデザイン批評の様態とその課題は、現在においても未だ解決されない批評の論点との歴史的な連続性を有するのである。